

戦争経験者による体験談

林副座長

ご紹介をいただきました林でございます。今日は私たちに与えられた時間は10分間でございますので、時間がありません。思いの丈を全部話すことはできないと思いますが、東京大空襲に特化してお話をしたいと思います。太平洋戦争、日本の私たちの第二次世界大戦というのは、昭和16年12月8日、1941年の暮れに起こりました。朝から大本營の発表のけたたましいニュースが流れて戦争状態に入ったと、真珠湾でのかくかくたる戦況が報道されまして当日は日本全国が大変活気に満ちた日がありました。私はその日の夜の出来事が、今だに鮮明に残っておりますが、当時私どもの小国民、小さな子どもたちですね、小国民といわれて軍国少年でした。もう例外無しで軍国少年でした。それは教育のしかるべくなした業だというふうに思うわけですが、長じていろいろ思うところがありまして、そういうふうには思っておりますが。その日の夜ですね、食卓を囲んでおりました。そのときに父親が一言ぽつんと「こんな戦争勝てるわけがない」と言ったのです。軍国少年の私は耳ざとくそういう言葉を聞きつけてですね、お膳から立ち上がって、父親に指を刺してお父さんは非国民だと、非国民という言葉が皆さんよく分からないかもしれませんが、国民に非ずと書くわけですね。当時は、国の方針にあるいは軍部の方針に反してもものを語れば非国民になる。わたしたちはもちろんそんな認識はありませんでしたから、父親に向かってそういいました。母親や私の兄弟はびっくりした顔をして一瞬箸をとめて私を見ましたけれど、父親がおもむろに顔を上げて私の顔をじっと見ました。何も言いませんでした。悲しそうなさびしそうな目で私を見たのをいまだによく覚えています。健全な思想を持った大人たちはあの戦争が無謀な戦争だということが初めからわかっていたのです。けれど、それを声を大にして語るができない時代だった。そういう時代が再び来ることを私たちは許してはならない、というふうに思っております。自由にものを言える時代それがなかったらその国はうまく立ち行かないでしょう。いずれどこかで難しい局面を迎えることになる。歴史の過ちを繰り返してはならないというそういう教訓を得たということです。以後、父親は戦争に関しては一切口を利きませんでした。それがきっと親父の覚悟だったのかもしれませんが。時間がありませんので、東京大空襲の話になるのですが、3月10日前年の1944年、昭和19年の暮れごろ、11月ごろから東京の空襲が常態的になってきました。翌年の3月10日というのは、東京大空襲の年ですが、夜中にですね、母親から、茂夫さん、学校が燃

えていると、母親から起こされました。学校というのは今の第一小学校です。当時、小学校は一つきり小金井にありませんでした。私の家は小学校から100メートル足らずの距離にありましたので、びっくりしてとびおきて寝巻きの上にマントを着て、そしてはだしで下駄を履いて学校に駆けつけました。学校は燃えてはいませんでした。しかし、当時、非常に立派な木造校舎が東の脇に南北に建っていきましてその東側のガラスに炎々と燃えているような炎の反射があったのです。私も母親も学校が燃えていると思いました。行って見たらそうではなかった。翻って後ろを見たら、後ろというのは東側です。愕然としました。東京の空全体が燃えているという感じでした。一瞬息を呑みました。子供心にもぎょっとしました。空全体が燃えているような印象でした。小金井の上空まで炎がかぶさっているような印象でそれはそれは大変ショッキングな私の体験でした。そのとき、ふと思ったのはお父さんはどうしているのだろうか。父親は東京の新宿にあります今の東京医科大学の前身の東京医学専門学校というところに行っていました。そのころはほとんどうちに帰ってくることはなかった。この空の下でお父さんは死んじゃったのだろうか、というふうに直感しました。そのとき胃が急にきりきりと痛くなって、脂汗が出てきて息ができなくなりました。たぶん自分では軍国少年で、竹やりを持ってでも戦うみたいなことをいっていたのですけれども、おそらくそのショッキングな光景にたぶん相当ストレス、ダメージを受けたのでしょうね。胃痙攣を起こしたんです。脂汗が出てきて、息が詰まって口が利けない。呼吸ができない。気がついたらひざを地面について、両手でこう体をかばっていました。私にとっては、大変、悲惨な経験でしたから、で、母親が後から来て、どうしたのといって、抱き起こして家に連れ帰ってくれたのですが、父親は2、3日して3日目に帰ってきました。生還したんです。空襲の状況の話は一切しませんでした。黙って帰ってきてもう服はぼろぼろというか焼け焦げだらけ。かぶっている似合わない戦闘帽も焼け焦げだらけ、顔はすすで真っ黒です。火災にあうとあんな顔になってしまうのかなというくらい真っ黒な顔でした。もうすすだらけ。そのまま横になって、二日間くらいずっと寝っぱなしでした。以来、絶対に戦争の話はしませんでした。東京大空襲で飛来した飛行機というのはボーイングB29という当時私は全長も横幅も含めて40メートル以上の飛行機だというふうに聞いていました。それが300機、次から次とやってくる。低空飛行なんですね、夜間の。サーチライトで照らしますとものすごい低空、ものすごい大きい飛行機が飛んでくるんです。次から次へと。それは、やっぱり一種の恐怖心へ変わった。そういう状況です。それでまあ東京に落とした焼夷弾の数、300機の飛行機が1,665トンの焼夷弾を落としました。30

0で除してみると1機が5.5トンの焼夷弾をつんできたという計算になるんですね。ボーイングB29といのは巨大な空の要塞といわれている飛行機ですから、そのくらいのものはつめたなのでしょう。下町、なぜ下町が狙われたのかというのは、日本の軍需産業を支えている中小の企業が町工場がたくさん下町にはある、あんなところに爆弾を落としてももったいない。焼き払ったほうが早いというのがアメリカの戦略だというのは、その後いろいろな資料で明らかになってきたことです。ですから、大変な火災になった。そのとき、日暮里に住んでいたという大学に行き始めて出会った友人が、俺は日暮里にいてあのころは法律とか勅令とかで空襲にあつて、火災が出たら逃げてはならんと、いうふうにそういう縛りがあつたそうです。まず、火を消せ、と。バケツなんかもつて行って消せるようなそんなもんじゃないよ、というんですね。もうみんな逃げちゃつたと。逃げ惑つたと。それで火災が終わつたあと、現地に行ってみたら、消防士車のまわりにはあちこちもう焼けこげだらけの人が転がつていたというんですよ。そういうときには何も無感覚になつていて、死んだ人間を見ても何とも思わなかつたというんですね。それで消防車が1台あつてよく見たら、運転士がハンドルを抱えたまま黒焦げになつていた。それで、消防車にちょっともたれかかつたら、かさかさかさと言音が出て、あつという間にその影が崩れたというんですね。ぞつとしたというんですね。そのとき、俺はあの時戦争の悲惨さを痛感したといつていました。同じころ、富士宮に疎開していた人間がやはり大学で一緒になつた人間があつたころは富士宮に疎開していた。東京の3月10日の大空襲がよくわかつたというんですね。もう向こうから見て、空が赤くなつて、ああもう東京がやられていゝというので一晩中大騒ぎだつたと。まさか、あんなところから東京の空襲は見えないだろうと僕が言つたら、何言つてんだ、東京から富士山が見えるだろうといわれました。あのころ妙に納得させられた話でしたけれども。それほど大火災だつたのですね。その日のうちに一晩で亡くなつた人が、確認されて記録に残つていゝだけで、10万5千人です。現代の戦争といゝのは戦地や戦場だけが戦いをする場所ではないんですね。銃後、銃後つてご存知ですか。銃の後ろと書く。つまり戦地や兵隊さんや国を支えている国の中の市民社会のことをいゝわけですけれど、そこに住んでいゝ市民たちも。もう戦地も戦場もない。銃後もみんな戦場になるんです。銃も何も持たない。戦争といゝのは結局殺し合ひなんですね、言つてみれば。もうあの時は、はっきりあの戦争は歴史の過ちだつた、というふうにそういう認識を持っています。それを繰り返してはならん、ということを実感させられました。あのころ、はじめから終わりまで1944年の11月ごろから東京空襲が始まりましたが、終戦のところまでで飛来した爆撃機の数

4, 900機だそうです。これは、いろんなところで記録されて書かれている、新聞報道でも何度もされている数字です。4, 900機、それだけの飛行機が来て東京に爆弾を落としたんです。落とした爆弾が11, 000発。落とした焼夷弾が38万9, 000発。そういう記録が残っています。それだけのものが東京にばら撒かれたんです。むしろ、戦地や戦場よりもよほど悲惨だったのではないのでしょうか。私はそういう体験を踏まえて、戦後、自由と民主主義の教育を受けて、あの戦争がいかにか過ちの戦争であったか、ひとたび戦争が起こると市民社会もみんな戦場になるんだという、そういう実感を持ちました。結局、戦争というのは人と人の殺し合いです。私は、やっぱりなんとしても平和は守らなければならない。平和の尊さを実感しました。それで戦争の悲惨さというのは、殺したり殺されたりという犠牲者が出るということのことじゃないんですね。戦後の生活にまで影響が出ました。私たちは、食料難に見舞われて、道端にある貧乏草といわれる草まで摘んで食べました。さつまいもの苗を取ったたねがらの芋を主食の代わりに食べました。すじだらけで中身はスカスカです。配給になったすけそうだら、配給になったアンモニアくさい、半ば腐ったような鮫の肉、主食代わりにさんざん食べさせられました。あの食糧難、あれは大変な体験でした。そうして、ご承知のとおり戦後最大なインフレが起きました。貨幣価値が紙くずみたいになりました。戦前に営々としてためられた国債を買ったお金が、みんなパーになりました。もう市民社会の悲惨さというのは実感したもの、経験したものでなければ分からない。さらにそれだけではなくて、皆さん方聞くとえっと思うかもしれませんが、シラミの問題です。生活が不衛生になって、日本全国どこに行ってもしらみがうじゃうじゃたかっているという状況でですね、さすがに進駐してきたアメリカ進駐軍はまずこれを何とかしなければならんということで、DDTを散布しました。今、あんなことをやったら、それこそ、副作用とか公害の問題で大騒ぎになると思いますが、とにかく部屋の戸を全部立てて布団は全部出して、畳の上に全部広げると。たんすは全部開けろと。引き出しも全部開けて。私どものまず頭から一列に、肩を並べて頭からしゃっしゃっ噴霧機で、DDTを掛けられて、それで背中の後ろのところに先端を差し入れてさっとやる。部屋の中にざっと撒いて、押入れの中にも撒く。部屋の中は真っ白です。それであつという間にいなくなりましたよ。シラミもノミも。虫は一切いなくなりました。まああれも悲惨な体験だった。戦争はあんなところまで影響が出るんだ。シラミも沸くんだと。私に与えられた時間は10分です。時間が、もうちょっとすぎますので、大変恐縮ですが、まだ他にも私は艦載機で銃撃を受けたことや、いろんな他にも体験がありますが、それを話している時間的余裕がありません

から、今日は1945年3月10日の東京大空襲に特化してお話をさせていただきました。やっぱりあの体験から平和はなんとしても守らなければならない、自由にものが言える世の中にならなければだめだと。それを痛感しています。それが私のあの戦争によって与えられた人生観です。ありがとうございました。以上です。